



# 赤ちゃん



こぐまじゅんこ

ぼくの家には、赤ちゃんがやってきた。

ぼくは、小学校3年生。つまり、8歳だ。

お父さんもお母さんも、8年ぶりの赤ちゃん誕生にはしゃぎまわっている。

ぼくも、もう8年も、ひとりっ子でいたわけだから、兄妹ができるのはうれしかった。

生まれた赤ちゃんは、女の子。

赤ちゃんができただけでも喜んでいた両親は、女の子と知って、とびあがらんばかりの喜びようだった。

なんでも、男の子と女の子を1人ずつ授かるというのが、母の若い頃からの夢だったそうだ。

赤ちゃんが生まれてから、お母さんは、のんびり寝ているのかと思ったらそうではなくて、おっぱいをあげたり、おむつを替えたり、ぼくの学校の準備につきあったり、それはそれは、忙しそうだった。

とうとうお母さんは、風邪をひいて寝込んでしまった。

毎日、無理していたんだと思う。

ぼくは、なるべくお母さんを手伝おうと思った。

妹のおむつを替えようとするんだけど、足を持ち上げて素早くおむつをセットすることができない。紙おむつは簡単だと思っていたのに、ぼくが、なんとかできるようになるのに、3日かかった。

そして、ぼくが1番困ったことは、妹が、泣きわめいて、ちっとも泣きやまないことだ。

ガラガラを渡しても、すぐにポイツと放り投げるし、「いないいないばあ」ってあやしても、ちょっと泣きやむだけで、すぐに泣きだしてしまう。

なんなんだろう。ぼくが嫌いなのか？

しまいには、ぼくが泣きたくなった。

見かねたお母さんが、

「おっぱいがほしいのかな？」

と言って起きてきて、おっぱいをやる。

妹は、小さな手で、おっぱいをおさえながらコクコク飲んでいる。

泣いているときは、あんなに憎らしいのに、こうしておっぱいを飲んでいる妹は、本当にかわいいと思える。

やがて、飲み疲れて、スヤスヤ眠ってしまった。

ちびっこギャングみたいな妹が、今は天使の顔で眠っている。  
本当に赤ちゃんって、小さくて可愛いなあ・・・とぼくは思った。  
こんなに小さい赤ちゃんが、みんなを振り回している。  
それでも、やっぱり赤ちゃんは愛しい存在で、ぼくたちの  
宝物だなあ、と思う。

「妹よ。これからもよろしくな。」  
とぼくは、つぶやいた。